

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
な か ま 編 集 委 員 会
〒285-0025
佐倉市 錦木町 198-3
電話 (043)485-1801

蘇った梵天塚 ----- 宮武 孝吉 月 見 草 ----- 山影 初子
西 興 部 村 ----- 奈 良 雅 広 故郷出雲と佐倉について---- 富 田 栄

孫との奮闘記

六角 学

毎年お盆に、我が家には埼玉に暮らす娘の子ども3人がやって来る。今年で7年目、両親は送りと迎えだけ、孫たちと十日間過ごす。

小学六年女、一年男、保育園年少の女とじいじ、ばあばの悪戦苦闘の十日間が始まる。

今年は先ず、孫との話し合いで、一日の過ごし方など決めた。起きる時間や寝る時間、どんなお手伝いをするか、遊びや宿題の時間など、規則正しい夏休みが過ごせるように心がけた計画を立てる。

しかし一日は長い。全ての計画は二日で早くも崩れる。「子どもだけ時間を決めるのはずるい」と言いだした。「大人と子どもは違う」といえば、長女が、「どこが違うの」と聞いてきて、いくら話しても「なぜなぜ」としつこく

問い詰める。なんだか口答えされているようで、だんだんむかついてきた。今年は、感情的になって叱ることは止めようと決めていたのだが、自信が無くなってしまいが、大丈夫かと心細くなる。

そこで、家内に相談し「じいじ、ばあば、大好き」といわれるために、孫の好きなようにさせ、居心地よく楽しい思い出ができるよう心がけることにする。

ゲームソフトやテレビまんがのグッズ購入から始まり、ゲームコーナーでの遊び、ファミレスでのドリンクバーや回転寿司などの外食、そして毎夜の花火である。

外出では、離発着する飛行機が間近で見られる成田空港滑走路北端に位置する「さくら山公園」に行く。真上に飛び立っていくジェット機の騒音が体に響き、これには感動

した様子。しかし「つまんない」といわれる前に後にする。これが嫌われないポイント。

「千葉市動物公園」では、話題のレッサーパンダなどの観察はそこそこに、目当ては去年も行った併設する遊園地「ドリームワールド」である。各々自分勝手に動くので汗を拭きながら付いて行くだけでヘトヘト。

今回、こんな訳で接しているうちに「こんな一面もあつたのか」と気づかされた反面、好かれるためには孫のその行動にストップをかけてしまふ「それはだめよ」の「だめ出し」をどれだけ我慢できるかなど考えさせられた。好かれるためには、労力が要る。

世の中「じいじ、ばあばには責任がないから楽だ」とよくいわれるが、そんなに甘いものではないと痛感させられたお盆休みであった。

(編集委員)

蘇った梵天塚

ぼんてんづか

下志津木戸場の梵天塚には23基の出羽三山碑が建っています。寛文4年（1664）のものは千葉県で二番目に古いといわれています。

塚には2本の大木がありました。平成21年の台風で倒れ、たくさんの三山碑が倒れたほか、大枝が隣接の会館の屋根に倒れるなどの被害をもたらしました。「村」では木を切り、倒れた石碑を起こし修復しました。

ところが平成23年3月の東日本大地震で再び多くの三山碑が倒壊しました。危険です。「村」では梵天塚を本格的に修復することにしました。石碑をクレーンで塚下に下ろし、塚上をブルドーザーで整地し、基礎を造り、石碑を建て直し、コンクリートで固めました。工事は5月の中旬に開始され、6月中旬に終了しました。

5月下旬、通りがかりに工

事に気がついた私は、下志津区の長老のSさんを訪ね、お話を聞きしました。

危険なので下志津に四つある出羽三山講の代表に集まっていたいただき相談。区（自治会）や農家組合にもご協力をお願いし、本格的な修復工事をすることにしました。

二度にわたる災害を経て、梵天塚には「百年の計」が図られたのであります。

工事には莫大な経費が必要です。このような修復工事を「村」の皆で相談し、お金を出し合って推進したのです。

石造文化財の保存はややもするとなおざりにされかねませんが、こうして「村」の文化財をしつかりと守った「村」の方々に、敬意を表したいと思います。

そして、丁寧な工事をされた地元の皆さまに感謝申し上げます。

調査報告書が図書館で閲覧できます。

（上志津原 宮武孝吉）

月見草

子供の頃、庭に月見草が植えてあった。夕暮れになると鮮やかな黄色の風流な花が咲いた。それは翌朝まで咲き昼頃には凋んでしま

う。月見草と言っていたが待宵草よいくさというらしい。暗闇の中で仄かな香りを漂わせていた。大人になって月見草を見かけなくなりその存在をも忘れていた。

昨年、太宰治の『富嶽百景』という小説を読んでいたら、太宰が御坂みさかに滞在中、バスに乗っていて、ふと車窓を見ると富士山をバックに見事に咲いている月見草に出合った。

富士には月見草がよく似合うという件くだりがあって、月見草に甚いたく感動したらしい。

それを読んでいたら私も子供の頃庭に咲いていた月見草が思い出され月見草の

絵を描いた。それは花の形も葉も茎もみなイメージだった。

下手な絵だったが不思議に気に入った。最近、夕方散歩中にある家の庭に月見草が咲いているのを見かけた。その家の方にお願ひして庭の月見草を見せて頂いた。

夕方見ず知らずの者が突然来て、月見草を見せて下さいと言うのだから、その方も驚いただろう。しかし親切に二輪ほど花を切って下さった。

私はお礼を言い、喜び勇んで家に帰り、やっと本物の月見草を安心して眺めた。月見草はその名の通り月明かりに仄く輝いてみえる。恋人に久しぶりで出会った様な気分だった。近頃、月見草が少なくな

った。空地や野原で咲いているのは花が小さく、それ程美しくないアレチマツヨイグサだ。やっぱり月見草はこれじゃなくちゃと、満足した。

（城内町 山影初子）

西興部村

そこは母が生まれ育った北海道の村だ。明治末、零落した鳥取の土族たちが移住して開拓の鋤を入れた。旭川から稚内へ向かう途中の山野の中にあるオホーツクに近い所だ。

北限の地にもかかわらず、人々は換金性の高い米作を試みた。寒冷な霧にはばまれ何度も失敗し、人々は貧しくなつて行つた。工場を作つて腐り易いジャガイモをデンプン粉にしたり、伐り出した木材を馬で運び出したりすることで、人々は糊口をしのいだ。そうした中、母の一家はいつの間にか小作に転落して行つた。そうした生活に厭気が差してか、祖母は乳飲み児の妹だけを連れて行商人と駆け落ちした。間もなく家に入った継母は母が小学校を終えるとき子守りとして外に出してしまつた。食い減らしである。そこから母の自活人生が始まつた。より良い待遇を求めてま

ず札幌の箱屋の親類を頼り下働きとして移るも、又しても子守りに使われ次に住み込みの洋品店員に。客の奥さんの紹介で満鉄職員一家の女中となり大連へ渡る。彼の地の夜学で学んだ技術を活かして陸軍病院のタイピストに合格し北京に移る。〇しとなつたのである。村を出てから十年が経つていた。その北京で同じ病院で軍属として経理で働く父と知り合い、一軒家を借り中国人の女中を雇つて暮らすまでになつた。母の人生の絶頂期である。

そうした羽振りの中、訳も分からず終戦に。蒋介石の軍に入つて一旗揚げると言う父を引きずつて引き上げ船で仙崎港に上陸した。リュックの荷物と価値の下がり続けるいくばくかのお札だけが戦後の始まりだつた。十年後、住み着いた東京から初めての里帰りをした。

ニシオコツペと呼ぶ村へ。
(中志津 奈良雅広)

故郷出雲と

佐倉について

私の出身は出雲だと隣の席に着いた男性に自己紹介した。彼は出雲空港の有る町を知っているかと聞いてきた。おべた(びっくりしたという方言)。故郷を離れ40数年こんな質問は初めて。さらに松本清張の小説「砂の器」の物悲しいストーリーの奥出雲の地名を言つていた。彼の友人に島根の人がいたからだ。

さて佐倉と出雲の関係は、雷電為右衛門のお抱え藩主は松江の松平家であつた。佐倉藩主の奥方に松江藩のお姫様があられた。これ等のことは佐倉学で知つた。佐倉と似ている点は印旛沼と宍道湖、成田山と出雲大社また松江でも開府400年のイベント開催中。佐倉藩主、藩士とも活躍して人材豊富。松江の藩主は風流人で茶人のせいか活躍した人は余り輩出せず。

氣質について、一言でいえば佐倉は勤勉で秀才タイプ、出雲は奥ゆかしく忍耐強いタイプ(私は不幸にしてこの氣質を受け継がなかつた)。それぞれの故郷に歴史あり、佐倉と比較してみるのも何か新しい発見があるかも知れない。

わが故郷は神話の国だ。伝説八岐大蛇の舞台である斐伊川の流れに囲まれた出雲平野で育ち、この佐倉にて巣立つた子供達は良縁を得、家を建てるまでになつた。

今年帰省し出雲大社に参詣し多くの御利益を頂いたとお礼報告した。帰りに新築祝いに恵比寿大黒の彫り額(縁起物)を買い求めた。

御親戚にでもまだ縁の薄い方がおられたら出雲大社に参詣される価値がある。松江の市民大学に通つていた従兄弟と歴史談義で酒を酌み交わしたく思つていた矢先に訃報があり、誠に残念であつた。

(上志津 富田 栄)

10月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

さくら道

世界陸上韓国テグの男子50^{*}競歩をテレビ観戦した。

2^{*}を折り返す街路周回コースを秒速4^{*}レベルで歩く妙なフォームで歩くのは2つの規則に縛られる為だ。ロス・オブ・コンタクト（常にどちらかの足が接地している事）とベントニー（前脚は接地の瞬間から地面と垂直になるまで膝を伸ばす事）だ。レース中、6人の審判員が違反に目

を光らせ、3度指摘されると失格。高温下でもありリタイア率42%と陸上競技中最も過酷なレースといわれる。指摘を2度受けるとフォームが気になり、スピードが鈍る。

ロシアが金銀を独占したが日本も3人の選手が参加して20位ぐらいから追い上げ、6、9、11位と3人も自己ベストをマークした。“頑張ろう日本” 4時間のレースを見終わって実に大きな感動を得た。

（稲田圭佑）

あとがき

地域新聞の7月22日号に「心の交流の場、投稿誌」の標題で『なかま』の紹介記事が載っていました。内容は経緯や活動状況、投稿誌としての役割について紹介されており、「文字がたぐ心と心には飾りはない」と結んでおります。

本誌は今月号で420号となり、35年間続いてきた事になります。創刊から今日に至

るまで、バトンをつないできた多くの先輩の地道な努力に敬意を表したいと思います。

過去の投稿文を改めて読んでみると、その内容は、大変多岐にわたっており、それぞれの思いが述べられ、探求され、それを上手に表現されている事に驚きます。

『なかま』の継続は、皆様の投稿が柱です。いつまでも心と心をつなぐ交流の場でありたいと思います。

（大蔵康次）